

造形活動への意欲感を引き出す題材の工夫 — 1年生「図画工作」の授業実践から —

鍵野 いずみ

(名古屋芸術大学 人間発達学部 子ども発達学科)

1 はじめに

保育士や小学校教員等の教育者を目指す本学学生には、“芸術”と名の付く大学を選択していることから、少なからず“芸術”にも関心をもっているであろうという一種の思い込みがあった。本学で図画工作指導法を柱とした美術領域で指導を始めて2年目、その通りの感触は確かにあるものの、芸術というくくりで見ると圧倒的に「音楽」への関心が高く、「美術」については苦手感や意欲関心の低さを感じている。そこで、実技授業として、大学で全学生が学ぶことのできる最後のチャンス、1年生の図画工作の授業で美術教育の重要性の認識を深めつつ、楽しく制作する体験を通して関心意欲を高めていけるような魅力ある題材を開発していきたいと考えた。

2 実態

(1) 苦手意識をもつ背景

学生には、小中学校時代に達成感のある制作活動の思い出が少ない。つまり、自分は下手だった、うまくできなかった、どうしてよいかわからなかったという「美術」に対する良いイメージが無いケースが多々見られた。

また、高校では「美術」を選択しておらず、久しぶりに制作をすることに、戸惑いを持ち、意欲や自信がわからないという様子も感じられた。

さらに、道具や用具を改めて一から用意したり、また、そのために費用を用立てる事に消極的で、準備が不十分な有様も制作活動を停滞させる要因になっている。

(2) 苦手とする点

小学校図画工作では、次のように便宜的に制作内

容が領域として整理されている。「絵」「立体」「工作」「造形遊び」「鑑賞」

中学校美術では「絵」「彫刻」「デザイン」「工芸」である。このような領域を設けることにより、小中学校の9年間を通して、バランスよく広く表現活動に取り組めるように配慮されている。しかし、初めは、好奇心をもってのびのびと表現活動に取り組んでいても、年齢が上がるにつれて、苦手意識をもつ子と得意で好きな子との個人差が顕著になっていく。それが、芸術大学に学ぶ大学生になるまで引きずっている現状がある。美術に対する抵抗感が発生するのは、以下の3点ではないかと考えている

ア 発想構想の面

何をどのように作りたいか、描きたいかのアイデアが浮かばない。創造力・想像力を働かせて、色や形などを使って表現することに苦痛を感じてしまう様子が見られる。

イ 技能の面

思ったような形や色を表現できず、もどかしさと不満が残ってしまい、自信を失っている。絵画においては、正確に物の形をとらえ描き表せない、着彩時の配色のセンス、塗り方の技の不器用さに自信を喪失し、やる気を失うといった様子が見られる。

ウ 鑑賞の面

身近な作品や芸術作品に興味関心がもてない。それは、鑑賞の経験が少ないことにも起因する。そのため、作品の良さや尊さに気づくことができず、芸術性をもったものを鑑賞する楽しさに気づいていない。

3 仮説と指導の工夫

上記のような実態の改善を図る題材の開発を目指して、2つの視点で指導の工夫を考えた

(1) 創造力・想像力を働かせつつも、発想や構想の段階でできる限り躓きが解消できる題材を工夫する。

→ 発想・構想の段階でベースとなるものをあらかじめ用意し、そこから発想を広げていけるような題材を工夫する。

(2) 子どもへの指導を前提とした技能指導をする

→ 小学校図画工作の範囲内の技能で制作でき、且つ、個々の技量に合わせて技法のレベルアップを図ることができる題材を工夫する。

4 実践A 『切り紙絵の魅力』

(1) マティスの切り紙絵について

『マティスの作品を活用した切り紙絵』

アンリ・マティスは20世紀を代表するフランスの画家である。フォービズム（野獣派）と呼ばれる活動の先駆者であり、自身の感情を独自の色彩感覚で描いた作品を生み出したことから「色の魔術師」とも呼ばれている。油絵を中心に制作をしていたが、晩年大病を患い体力が衰えたことから、色紙を切り張りして制作をする「切り紙絵」の手法を生み出していった。このマティスの切り紙絵の作品を活用した題材を考えた。

(2) マティスの切り紙絵に注目した理由

ア あるものを忠実に再現しようとしたものではなく、大胆でのびのびとした形や色が楽しめる。
イ 「絵=描く、彩色」ではなく、紙を切って貼ることも絵画であるという新たな認識と体験ができる。

ウ 芸術性の高い作品を鑑賞する機会ともなり、美術の世界を広げることができる。

(3) 制作の手順

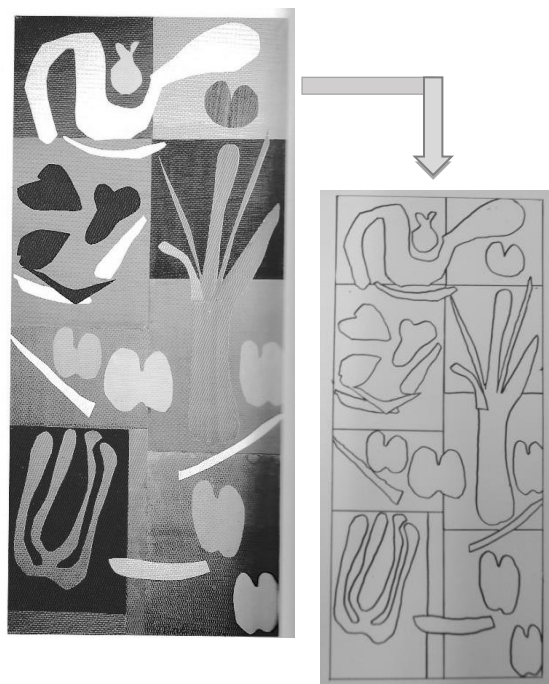
① マティスについて知る

② 自分が制作する作品を選ぶ

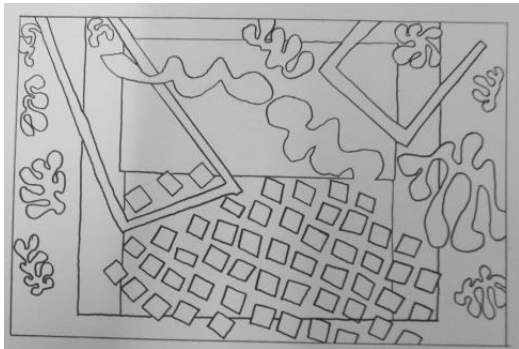
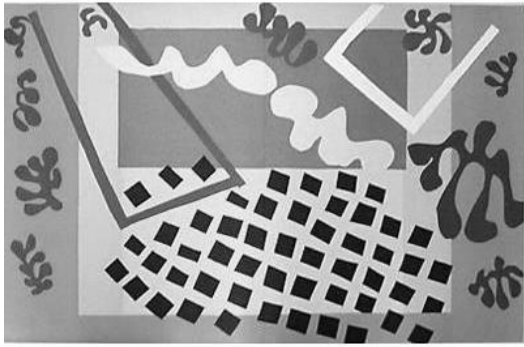
マティスの作品から下記の3点を教材として選んだ。それを、八つ切り大に拡大し、輪郭だけを取り、画用紙に印刷したものを用意した。

この3点から、自分が制作するものを選ぶようにした。この段階では、題名を明かさず、カラーの原画も紹介していない。学生は、白黒の輪郭線のみから想像を広げ、自分なりの色選びをして各自オリジナルの作品作りを進めた。

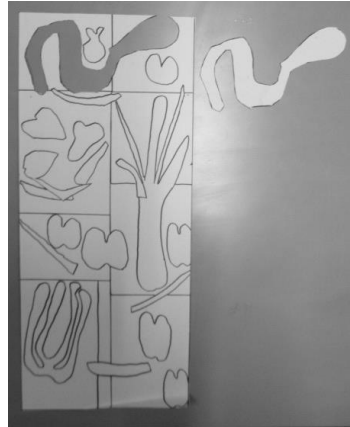
「植物」



「空中ブランコ」



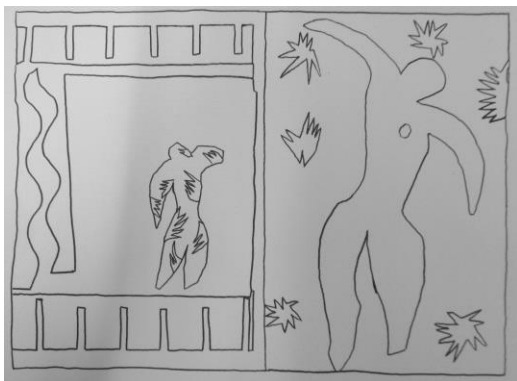
③各パーツを色紙で切り出す



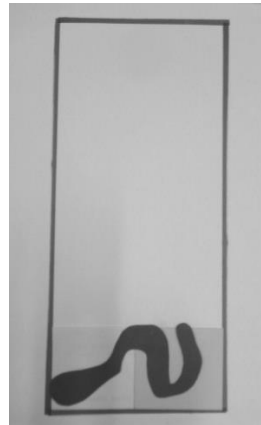
「ジャズ」



「イカルス」



④貼り付けていく



⑤振り返りをする

実際のマティスの作品と題名を見て、自作と比較しながら気づいたことや感想をまとめる。

(4) 学生作品の紹介



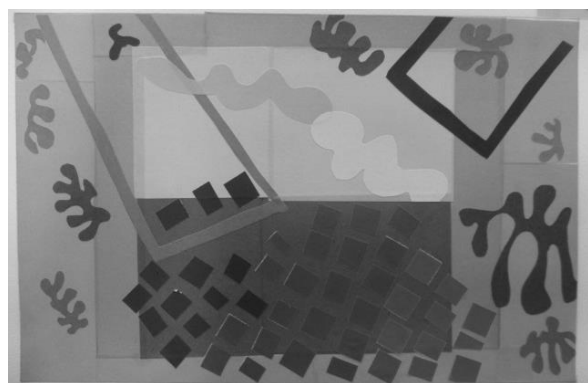
題名「海草」

海の中を連想し、配色のポイントは海の深さや浅さ。黄色のブロックは砂をイメージしている。丁寧に切って貼ることが楽しかったという感想の通り、美しい仕上がりである。



題名「知らない世界」

色々な形や色が様々な生き物が楽しそうに動いている自分の知らない世界を表現している。ブロック部分は三色のグラデーションになっており、動きを意識して制作している。



題名「海底の庭」

同じく海をイメージし、ブロック部分をグラデーションで表した。絵の具のように自在に色の変化をつけづらいので、色選びが最大のポイントになることを振り返りで挙げている。



題名「3a VALSA DE ESQUINA」

色々なパーツの形が音の粒にみえ、ブラジルクラシックの「街角のワルツ 3a VALSA DE ESQUINA」の楽曲を連想した作品。

ブラジルを連想する色使いは外国のおもちゃのイメージとも重なる。とても楽しい制作だったと感想に書かれている。



題名「紅葉の秋」

秋と訪れる冬を表した色使いで仕上げている。右側の背景を4色に分けたところ、くすみのある中間色で仕上げたところが独創的である。同デザインでも色の違いで全く異なる作品になる面白さに気づいていた。



題名「ダンサー」

体のシルエットが踊っているように見えたため、題名も配色もそれを意図して制作した。貼る順番や段取りが難しかったが、それゆえ達成感を感じることができたとのことである。



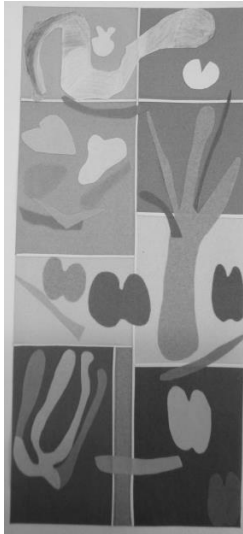
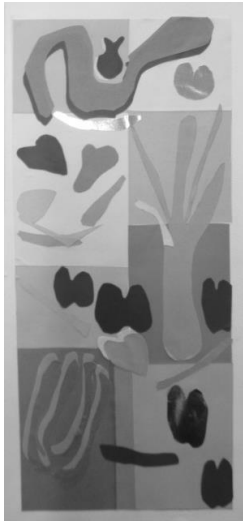
題名「希望」

右が「死」左が「生き返って新たな人生を歩む姿」を表現している。右左で共通色を残して調和させ、足の形や色のバランスを崩すことで面白味を演出し、黄色の人間内のカラフルさが希望を表すなど思いが詰まっている。



題名「踊り人」

本人曰く、不器用ではさみは苦手とのこと。しかし、連想した「祭り」「踊る姿」を、原面には無いきらめきの様子をちりばめたり、複数の色使いで背景を表したり、のびのびとした形で大胆に仕上げている。



題名「野菜のダンス」

大きなパーツは目立つが、小さなパーツは動きを効果的に見せるような配置になっていると制作者なりに分析している。上部と左下のパーツが二重の配色になっており、他の作品には見られない独創的な表現が魅力となっている作品である。

題名「自然」

空、地面、木、葉、風や四季を思わせる配色である。丁寧な切り口や糊付けに力を注いで制作しており、美しい仕上げである。また、背景の色の仕切りには細く切った白線を張ったり、上部の雲を連想させる形には色鉛筆で虹色に塗ったりして、オリジナリティーあふれる作品となった。

題名「まど」

色を使って各パーツを表すことが当然のような発想の中、このように白を基調に部分的に差し色を使うというのは斬新である。光が差し込んだステンドグラスの窓から風に揺られた植物が見えている様子を表現している。背景に淡い色を選び、寒色系、暖色系と中間色を組み合わせながら巧みに配置している。

(5) 考察

以下が、制作後の振り返り（抜粋）である。

- もともとの作品を知らないまま、自分の思い通りに作っていくのは、初めての経験だったが、この方法でも、一人一人の個性が出て面白かった。
- 切り絵というともっと複雑なものだと思っていたが、このような単純な作り方があることを知り、幼い子どもでもできるのではないかと感じた。

原画のデザインを頼りに配色のみに集中することで抵抗感が軽減され、楽しく取り組むことができたという声が多かった。そして、簡単だと思っていた形を一つ一つ切りながら、形や構図のもつ意味や魅力に気づく機会にもなった。途中自分なりのアイデアで変更したり付け加えたりしてもよいとしたことは創造力を高めるきっかけになり、効果的であったといえる。

中には、「体力が衰えたマティスが助手の手伝いはあったものの、たくさんの切り紙絵を創り上げた事にあらためて驚いた。実際にやってみてこそ、細かさに気づいたし、正常に手を動かしても難しいところがあった。大胆な表現もあり、自分じゃ思いつかないような心惹かれる作品だった」と、マティスの生き様や創作に対する熱いエネルギーを感じ取り、芸術的な感性を高めている様子も伺えた。

マティスの3作品の原画や仲間の作品を見て、同じデザインでも配色によって作品から受ける感じは様々に変わり、人それぞれ自由に想像を広げることができる面白さがあることに、多くが気づいていた。

こうした経験を踏まえて、次に一から制作に取り組むという段階的な計画をする工夫が必要であると考えた。

余談であるが、この授業の実施後、教材として選んだマティスの「空中ブランコ」の作品が、図画工作教科書（開隆堂）6年生「切り絵」に掲載されていることを発見した。マティスの作品が図画工作において教育的価値をもつものであることをあらためて認識することとなった。

5 実践B 『あなたもピカソ』

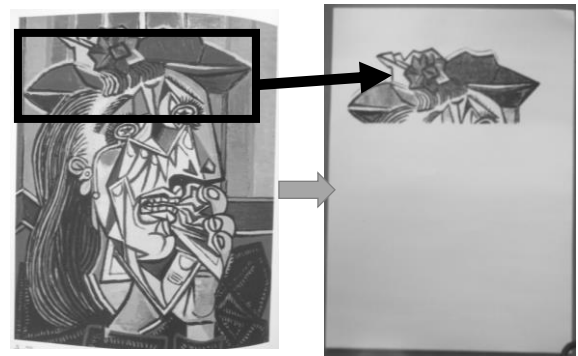
(1) ピカソ『泣く女』について

先に、美術への興味関心が低いとの見解を述べたが、それを象徴する様子として、美術館で鑑賞をした経験があるのは1割程度という状況がある。アンケート調査によれば、映画館へは行くが美術館には行こうと思わない、興味がないと答える割合が多い。当然美術史における様々な芸術家たちについて

の知識も少なく、興味をもつごくわずかな学生たちとの差は大きい。そのような中で、ほとんどの学生が「ピカソ」については聞いたことがある、知っていると答える。小中学校では平和教育につながる作品としてピカソの『ゲルニカ』が鑑賞教育の題材として積極的に取り入れられてきていることも影響していると考えた。そこで、少しでも認識のある画家や作品をもとに芸術の世界を広げていけたらと考えた。

いうまでもなく、スペイン内戦の悲劇的な出来事を表した「ゲルニカ」に描かれた、死んだ子どもを抱いて泣く女を基にして描いたのが『泣く女』である。この『泣く女』シリーズは100種類以上のバリエーションがあるといわれているが、最も完成度の高い有名な作品〔(2)作品〕を教材として授業を考案した。

(2) 教材としての扱い方



上図にあるように、原画をコピーし、帽子を被った顔の5分の1ほどのみ残して画用紙に印刷したものを用意した。その時、背景も取り消し、印刷された形に注目がいくようにした。

この続きの顔を、固定概念にとらわれずに自分で想像して描くという制作を行った。ピカソの原画は作品完成後に紹介し自作のものと比較し、どのような表現の工夫等があるかについて鑑賞することにした。こうすることで、制作を機に優れた芸術家を知り、その作品を鑑賞して美術の知識や世界を広げられることもできると考えた。

(3) 制作の手順

① 『泣く女』の作品と作者を知る



上記のように4点の『泣く女』の作品をモノトーンにして、作者と題名を伏せてプリントで示した。

そして、4作品に共通した題名と作者を考えさせた。(①)

作者については、「不明」、「ピカソ」とした者がそれぞれ半数ずついた。ピカソとした者の中には、知っていたわけではなく、画風からピカソではないかと想像した者も多かった。

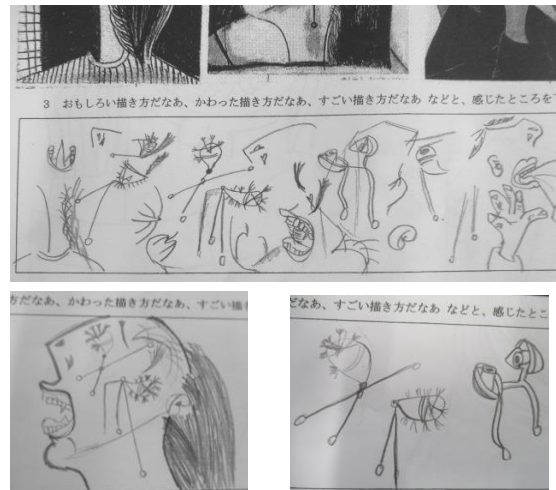
題名については、知らないにも関わらず、「泣く女」とする者も複数いた。その他は、「悲しみ、苦しみ、嘆き悲しむ、泣き叫ぶ」等々見事に作品のテーマをとらえたものばかりであった。ピカソの表現の巧みさもあるが、作者の意図や思いを感じ取る力は育っており、より高めていくことができる可能性を感じた。

② ピカソの描写を模写する



4作品を見て、面白い、すごいと感じる部分を模写した。実際に自分で描くことで固定概念を覆した表現の豊かさを体感し、自分の表現の参考にすることがねらいである。

<パーツの模写例>



③ アイデアスケッチをする

直接本描き用の画用紙に描くのではなく、まずアイデアをラフスケッチする段階を設けた。

<アイデアスケッチ例>



④ 下描きをする

アイデアスケッチをもとにして、本描き用画用紙に下描きをしていく。

そのまま写すということではなく、どのような表情にするのかを再整理しながら、形の修正を兼ねて進めるように助言をした。

また、何も言わないとシャープペンシルで下描きをする実態がある。下描きは、画用紙等の表面を傷めないように、芯の柔らかい鉛筆で下描きをするという基本を押さえる必要があった。

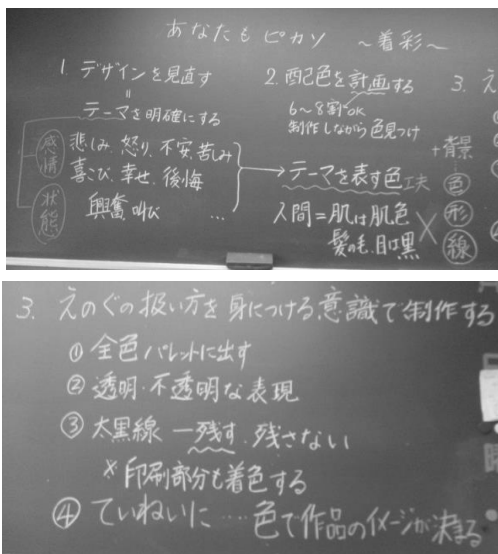
本描きでは、アイデアスケッチの図柄を拡大する必要があり、全く同じに描くということにはならない。忠実に再現しようとする傾向があったが、その

必要はなく、細部にこだわらず、のびのびとした線で描くように助言した。



⑤ 着色する

<着色時の注意事項を示した板書>



着色にあたり、複数事項の確認をした。

ア デザインの最終確認をする。

イ 表したいことを明確にする。

どのような感情（喜怒哀楽）

どのような状態（叫ぶ、泣く、笑う等）を表そうとしているのかを明確にすることで配色が決まっていくことを助言した。

ウ 絵の具の基本的な技法を習得する。

着色に当たっては、板書例にあるように下記の内容を指導した。

<絵の具の技法の指導内容>

- ア 豊かな色彩表現のために全色パレットに出す
- イ 混色、重ね塗り、透明・不透明、点描、ぼかし、グラデーションなどの技法を取り入れる
- ウ 筆を使い分ける、水を調整するために雑巾を活用する
- エ 輪郭線を生かすか無くすか、塗り方を工夫する

また、自分が指導者として絵の具の使い方を指導すると仮定し、基本的な技能指導の内容やコツを確かめたり見つけたりするように着色を進める事を助言した。

⑥ 振返りをする

以下が振返りの記述内容（抜粋）である。

- ・人間の顔の正確な描写を目的としないので、技能面で上手下手を気にせずに取りむることができた。
- ・人間の顔はこうだという固定概念にとらわれず、自由楽しく描けた。
- ・芸術家の作品の一部分から形や色をつなげ描いていくのは、全く「無」の状態から創っていくより取り組みやすい。
- ・芸術家（今回はピカソ）やその芸術家の表現に対する考え方や見方についての知識を得ると共に、その芸術家に興味関心をもつことができた。ピカソが身近に感じられるようになった。
- ・これまでの自分だったら描くことはなかったであろう表現にチャレンジする機会になった。自分にもこんな表現ができるのだと、新鮮で新たな可能性に気づくことができた。
- ・同じ感情や状態を表しても人によって形や色などの選び方が違い、それぞれ個性ある作品ができて楽しい。子ども達であれば、もっと柔軟で面白いアイデアをもった表現が生まれるのではないかな。
- ・仲間の作品を見るのが楽しかった。鑑賞し合うことで、色々な表現や考え方、アイデアの交流を図る事ができて、自分の創造性（想像性）を発揮したりより高めたりすることにもなるので面白かった。

<振返りの内容>

「あなたとピカソ」 振り返り 1/4 名前

学級番号

題名

題名の理由（形、色、構成、大きさ、動きなど工夫した点が顕著していると認める）
※思い通りにいかなかったことや失敗したと思うところも併せて記述して下さい。

「あなたとピカソ」という題材に対する感想

小学生中・高学年に対する絵の具の技能指導について、
「図画工作」の授業を通して学んだことから記述してください。 ※簡易書き 複数可

(4) 学生作品の紹介



題名『不足』

金銭的に豊かで着飾っている女性だが、愛情に飢え心が満たされない思いを抱えている。悲しみを寒色やモノトーンで、人間の欲を唇の強い赤や衣装、アクセサリーで描いたそうである。感情を形や色、構成で表すことが楽しかったという感想をもち、デザイン化された瞳や色鮮やかな配色が印象的である。



題名『愛想』

口元は笑っているが、涙が出ているという複雑な感情がテーマである。背景の手は周囲の人間との関係を示し、赤い涙と共に辛さや疲労、苦しみを表現している。実際に描いてみて、ピカソのように形を崩すのは意外と難しいが、自分の想いを自分なりの表現で描けば人それぞれの作品ができて面白いという感想をもっている。巧みな作品である。



題名『5時のセールで喜ぶ女』

飛び出した目や大きく開けた口で驚きや喜びを表現している。また、夕方5時を連想させるためにオレンジ系でまとめている。黄色や青、黄緑等で丁寧に全面着色を施した後、平筆で朱色を上から重ね塗りをするという大胆な手法をとった。原画の一部を基に自分で自由に描くのが新鮮だったと感想を述べた。



題名『偽り』

顔の左右で表情を分け、赤が表の顔、青が裏の顔だそうである。この作者は特に絵画表現を苦手としているが、背景を二色にした構図や、帽子の際の緑の絶妙な配色、豊かな色使い、各色の丁寧な発色など、苦手意識をもちながらも熱心に描いた事が伝わってくる。普段描かないような描き方が面白かったという感想をもっている。



題名『高貴の涙』

原画の一部分から連想した気位の高い貴族が思い切り泣く姿を表現したいと考えたそうである。強烈な表情やきらびやかな印象を朱や黄を駆使して表現している。背景の処理も巧みである。自由に発想して描くのは楽しく、自分なりの新たな表現を見つけることができたとの感想である。



題名『虫歯』

歯は所々紫色、顔は腫れており、虫歯の痛さに泣く様子を表している。難しく考えずにこのように単純に楽しむことも大切である。題名は単純だが配色や着彩の丁寧さは巧みである。片目は位置が崩れ閉じ、涙も滝のような様で个性的である。新たな見方を学んだという感想を述べている。

(5) 考察

前述の振り返りからも分かる通り、「手掛かりになるものを用意することで取り組みやすくなる」「上手下手にとらわれずに、自由に楽しく取り組む」というねらいは一定程度達成できたといえる。また、互いの作品を鑑賞することが、見方や考え方をさらに広げることになることに気づき、その重要さをとらえることができていた。そして、優れた芸術作品をもとに自分の作品を創り上げていく制作スタイルの新鮮さは意欲関心も生んだといえる。制作活動に、今一つ熱心さや根気が乏しい学生が、豊かな色合いで根気よく制作に取り組む姿も複数みられたのはその表れであると考えている。

同じ一つの形から色々な形や色、構成を生み出す面白さを感じとり、創造性や個性を伸ばす可能性をもった題材であることに気づき、指導的立場に立って、図画工作の題材として扱える可能性に気づいた面も見られた。

一方、実物通り正確に描くのではなく、ピカソのように単純化させて自由に表現することは楽しいが、固定概念を覆すような独創的で魅力的な形や色、構図などを創り出す事は容易ではないということに気づいた様子も多かった。

このことは、取り組みやすさも面白味も感じつつ、ある程度の付加価値をもたせることが重要であることを表している。造形的な力を高め、達成感ももつために大切な要素である。

さらに、適当に描いているようにみえるピカソの絵が、実際に自分で描いてみると簡単にはいかず、あらためてピカソの芸術性に気づく例も多く、鑑賞を深める面ももっているといえる。

注目すべき意見として、ある表現力の高い学生からは、「パーツを崩して意図的に配置することはいくらかでもできるが、そこに本物の独自性や個性を芸術的に表現するのはセンスがないと難しい」という鋭い指摘が出された。美術に対して意欲的で技能もちあわせている学生にとっても、やりがいと発見のある制作活動になるような授業展開や助言、支援

を考える必要がある。

技術面では、パレットに多くの色を出しておくということには抵抗があり、実際には実践しようとしていない様子が多々みられ、自分が使おうとする色のみを出している場合が多かった。そのため、作品に豊かさや深みが乏しく、色彩的なセンスを磨いたり本作品の仕上がりに物足りなさを感じたりする状況がある。この例にみられるように、技能的に自信をもてない者ほど、技法のノウハウを示しても実践しようとしていない傾向がある。その結果、作品の完成度に達成感を得られず、意欲が高まらないというループから抜け出せない状況がある。元々、興味関心が高く、意欲のある者は、どのような制作にも挑戦と失敗を恐れない。制作に対してモチベーションの低い者の自信や意欲を高めるためにはショートステップでトレーニング的な取組を入れることが有効ではないかと考える。その場合、授業時間の確保とシラバスの工夫、意欲関心や高い技能をもった者に対する活動の工夫などを考えていく必要がある。

6 おわりに

人間発達学部では、中学校卒業以来、全く制作の機会はなかったという学生と、高校は美術を選択したり、美術部であったりしてある程度の専門性を身に付けている学生の両極端な実態がある。従って、“芸術大学”ではあるものの、“美術”については意欲関心、経験、技能等に個人差がある。そのような中、図画工作の授業は将来の進路にかかわらず、美術的な制作に取り組むことができる最後の機会である。絵画、立体、工作、デザイン、鑑賞とできるだけ、幅広く経験をさせたい。そして、教育者として基本的な技能指導の知識も身に付けることも計画的に進めていきたい。

しかし、その実現のためには、苦手意識や無関心を少しでも払拭、改善し、表現活動の楽しさ、面白さ、教育的意義を体得することが基となる。特に、絵画表現は年齢の成長とともに、苦手感が高まる領域である。貴重な図画工作の授業において、今後も、新鮮、かつ意欲関心の高まる題材の開発を進めていきたい。